『神戸』第一話　奇妙なエジプト人の話

それは奇妙なホテルであった。

神戸の中央、山から海へ一直線に下りるトーアロード（その頃の外国語排斥から東亜道路と呼ばれていた）の中途に、芝居の建物のように朱に塗られたそのホテルがあった。

私はその後、空襲が始まるまで、そのホテルの長期滞在客であったが、同宿の人々も、根が生えたようにそのホテルに居据わっていた。彼、あるいは彼女等の国籍は、日本人が十二人、白系ロシア女一人、トルコタタール夫婦一組、エジプト男一人、台湾男一人、朝鮮女一人であった。十二人の日本人の中、男は私の他に中年の病院長が一人で、あとの十人はバーのマダムか、そこに働いている女であった。彼女等は、停泊中の、ドイツの潜水艦や貨物船の乗組員が持ち込んでくる、缶詰や黒パンを食って生きていた。しかし、そのホテルに下宿している女達は、ホテルの自分の部屋に男を連れ込むことは絶対にしなかった。そういうことは「だらしがない」といわれ、仲間の軽蔑を買うからである。

その頃の私は商人であった。しかし、同宿の人達は、外人までが（ドイツの水兵達も）私を「センセイ」と呼んでいた。

彼女達は「センセイ」の部屋へ、種々雑多な身辺の問題を持ち込んできたし、県庁の外事課に睨まれている外人達は、戦時の微妙な身分上の問題を持ち込んできた。

私の商売は軍需会社に雑貨を納入するのであったが、極端な物資の不足から、商売はひどく閑散で、私はいつも貧乏していた。私は一日の大半を、トーアロードに面した、二階の部屋の窓に頬杖をついて、通行人を眺めて暮すのであった。

その窓の下には、三日に一度位、不思議な狂人が現われた。見たと

ころ長身の普通のルンペンだが、彼は気に入りの場所に来ると、寒風が吹きまくっている時でも、身の回りの物を全部脱ぎ捨て、六尺褌一本の姿となって腕を組み、天を仰いで棒立ちとなり、左の踵を軸にして、そのままの位置で小刻みに身体を回転し始める。生きた独楽のように、グルグルグルグルと彼は回転する。天を仰いだ彼の眼と、窓から見下ろす私の目が合うと、彼は「今日は」と挨拶した。

私は彼に、何故そのようにグルグル回転するかと訊いてみた。「こうすると乱れた心が静まるのです」と彼の答は大変物静かであった。寒くはないかと訊くと「熱いからだを冷ますのです」という。つまり彼は、私達もそうしたい事を唯一人実行しているのであった。彼は時々「あんたもここへ下りて来てやってみませんか」と礼儀正しく勧誘してくれたが、私はあいかわらず、窓に頬杖をついたままであった。

彼が二十分位も回転運動を試みて、静かに檻褸(ぼろ)をまとって立ち去った後は、ヨハネの去った荒野の趣であった。それから二年後には、彼の気に入りの場所に、天から無数の火の玉が降り、数万の市民が裸にされて、キリキリ舞をしたのである。

下宿人のエジプト人マジット・エルバ氏は私の親友となった。彼は当時日本に在留する唯二人のエジプト人の一人であった。いわゆる敵性国人であったが、引き揚げなかった他の英米仏人同様に、旅行は許されなかったが、神戸市内では一応自由であった。彼はこの奇妙なホテルでの、最も奇妙な人物であった。商売は肉屋で、山の手の通りに清潔な店を持っていたが、もう商品はカラッポであった。彼はその店に独り住む事を好まず、わざわざホテルに滞在していた。年は幾つなのか、さっぱり見当がつかないが、多分四十歳そこそこであったろう。小麦色の彫りの深い顔には、いつも髭の剃り跡が青々としていた。恐ろしく胸の厚い男で、まるで桶の胴のようであった。こういう

放浪者に似ず、英語も日本語も下手糞であった。日本滞留十年で、ヨーロッパ、アメリカ、南米と流浪の末、日本神戸に根の生えたエジプト種の強い蘆である。私は青春時代を、赤道直下の英領植民地で暮したので、彼のコスモポリタン気質はよく判った。彼のお国自慢は、名前のエルバに由来し、彼の説に従えば、彼は正しくナポレオンの追放された島の出生だというのである。彼は何度もこの話をしたが、その時の彼はナポレオンの落胤のような顔をした。

マジットも私も貧乏だったので、夜は大抵どちらかの部屋で、黙って煙草を吹かすのが常であった。私の部屋には十数枚のレコードがあった。それは皆、近東やアフリカを主題として音楽で、青年時代からの、私の夢の泉であった。私達は、彼がどこからか探し出してくるビールを、実に大切に飲みながら、一夜の歓をつくすのであったが、彼はレコードの一枚毎に「行き過ぎの観賞」をして、砂漠のオアシスや、駱駝の隊商や、ペルシャ市場の物売姿を呼び出し、感極まってでたらめ踊りを踊り、私はそれに狂気の拍手を送るのであった。そういう我等を見守るのは、どのような神であったか、所詮は邪教の神であって、一流の神様ではなかったであろう。

神様といえば、マジットは回教徒で、宗門の戒律は厳重に守っていた。ある時、彼は歯槽膿漏が悪化して高熱を出し、頬を腫らして遂に市民病院に入院した。私は親友のために、毎日一度づつ、手料理を作って自転車で運んだが、ある日、マッシュド・ポテトを作り、うっかりベーコンを刻み込んだまま、彼の枕頭に供した。彼は歓声を上げて口一杯に頬張ったが、ウッという声と共に全部吐き出し、大急ぎで嗽(うがい)をした。ベーコンは豚で、それは回教徒のタブーである。彼は世にも情けない顔をして「センセイ、ダレニモイウナ」といった。

このエジプト人が、どこから生活費を得て来るのか、誰にも判らなかった。彼が時たま、牛肉の大塊をホテルの厨房に売りつけると、翌

日の新聞に、姫路郊外で耕牛が一頭盗まれ、加古川の河原で密殺された記事が出るのであった。哀しきエジプト人は、独特のルートから、そういうものを仲買いしていたのであろう。彼は随分窮乏していたが、一度も私に金を貸せと言わなかった。私の貧乏をよく知っているのだ。彼の入院中、私が当時の金で五十円作って見舞いのつもりで与えたら、退院するとすぐ「ワタシビンボウ、センセイビンボウ」といって返してよこした。そういう彼に、私には合点のゆかない意外な大金が入ることがある。彼は忽ちサルタンになって、日頃のウップンを一夜にして放散する。いつも文無しの彼を軽蔑している同宿の淑女達の中で、最も若く、最も豊満な一人を選んで、彼女のバーに押しかけ、札びらを切った末、どこかのホテルで一夜を明かして来るのだ。翌日、彼女は忽ち富み、彼は再び貧しい。あまりの事に柄もなく私が忠告がましい事をいうと、彼は得意のウインクを一発放って「オーマー・カイヤム」と呪文のように、ペルシャ楽天詩人の名を称え、あまつさえ、マリ子が水を飲むと、透き通った咽喉を、水の下りるのが見えたなどとのろけるのであった。

マジットにはカイロに富商の叔父があるとかで、その伯父さんが、日本に足止めを食らって窮乏している甥に大金を送ってきますようというのが、彼のアラーの神への日夜の祈祷であった。彼に従えば、その金額は、十人のマリ子を一年位満足させるに足りるのであった。送金ルートは国際赤十字、スイス公使館、あるいはドイツ潜水艦が密輸して来るかも知れないという。勿論それは追いつめられた彼の白昼の夢にすぎないが、私はその実現を彼のために切望した。それというのも、彼は一着だけのフラノのズボンの膝に穴が開いてきたので、膝の辺りでチョン切ってショートパンツに改造し、厳寒の折、広間のストーブに当る始末であったからだ。しかし、彼の胸板は依然として厚く、髭の剃り跡はいつもの通り青々としていた。

マジットはのべつ嘘をついた。彼の各国漫遊談は、その嘘が混じるために、実に独創的で、新鮮で、いつまで聞いていても飽きなかった。だから私は、それは嘘だろうなどとは決していわなかった。このエジプトのホラ男爵は、第一次世界大戦の時、エジプト軍の軍曹であったというのである。驚いた事にそれは真実であった。彼は全世界を流浪中、英国風の、エジプト軍の軍服姿の写真を一枚、肌身離さず持ち回って来たが、ある時それを「イチバントモダチセンセイ」に進呈するといって私にくれた。だから、後年剃り落した真黒い八字髭を左右に撥ねた彼の写真は、かくして今も私の机にある。

彼は砂漠の一戦以来「ドイツハテキ」と肝に銘じたらしく、ドイツ潜水艦の水兵達が、ホテルのロビーでビールを飲んでいると、私に意味深長なウインクを送るのであった。ドイツ兵達は、豊富な食糧をかかえ込んで上陸し、ホテル住まいの淑女達を奪い去るのだから、マジット・エルバの強敵にちがいない。彼はドイツ水兵の身体に密着した上衣や、途方もないラッパズボンを批評して「オペラヘイタイ」と称して軽蔑していた。彼の説によれば、立派な兵隊は桶の胴のような胸を持ち、おしゃべりであってはならないのだった。実際、ドイツ水兵は饒舌家揃いであった。私は窓からいつも観察するのだが、彼等は坂の下から二人ずつ上って来る。両手には陸上で一泊するための食糧の他に、どうして手に入れるのか、何人分かの食糧を抱いて来る。彼等は歩きながらも、顔を相手の方に向けて絶えず話しつづける。ホテルに来てからも、そこがロビーで、往来とちがうだけで、彼等は前の通り話しつづける。艦の中でも同じであろう。私はドイツ人種が多弁人種とは知らなかったので、呆れかえっていたから、エルバ氏の批評には全く同感であった。

彼は日本の戦争については、固く沈黙を守っていたが、私にだけは時々低い声で「ニホンカワイソウ」とささやいた。それは、大戦果大

戦果で日本中が有頂天の時であった。

ホテルで、マジット・エルバ氏に好意を持っていたのは、私の他に老マネージャーであった。この白髪の好人物は、パパさんの愛称で内外人に愛されていたが、ホテルの持ち主の義弟で、その持ち主は没落しかかっていた。そしてホテルは既に新しい経営者の手に移っていたが、パパさんの人望は高く、この老人を首にするなら、わたし達も出てゆくという、女客達の強硬な申し入れのために、老マネージャーは元のまま深夜まで働いていた。月末が来ると、この善人はマジット・エルバの勘定を少なくするために心肝を砕くのであった。老人の長男は、少女のような妻と赤ん坊を残して既に戦死していた。私はストーブの傍にパパさんとマジットが黙って椅子に掛け、心中互いにいたわり合っている姿をよく見かけた。私達三人は話が合ったのである。

ホテルの下宿人の中で日本人は殆どがホテルの食事に頼っていたので、彼等を食わせるだけでも、老マネージャーの苦労は並々ならず、その過労と、彼自身の悲運のため、一夜、気の毒な老人は、帳場の椅子に掛けたまま、心臓麻痺で頓死してしまった。その通夜の席に集った女達はみな泣いたが、中でも最も大きな声で号泣したのはマジット・エルバであった。この異邦人は、死者の足の裏を自分の黒い額に押し当てて慟哭した。老いたる親友の厚情に報い得なかった彼は、せめて最後に、老友の足で額を踏みつけて貰いたかったのであろうか。

この難破船のようなホテルは、それから二年後に、跡形もなく焼けてしまった。戦後九年、エジプト人、マジット・エルバ氏の消息は全く絶えてしまった。（四五五〇字：引用にあたって一部表現と表記を改めた）

西東三鬼『神戸・新神戸・俳愚伝』（出帆社、昭和五〇）より